

CONTENTS

- 2 生ける水の川 チョー・ヨンギ牧師
・新年、父なる神様に会いましょう
- 4 メッセージ 志垣重政牧師
・主の御旨がなんであるかを悟りなさい
- 7 主と歩む ヘンリー・グルーバー牧師
・死んだ人は勝利できます
- 12 神の国 アシエル・イントレーター牧師
・第八日目
- 17 写真のある『窓』 キム・ジュソク牧師
・神の声は……
- 18 特集 | 真なる祝福とは——
・八つの祝福、天国を所有した者の祝福—— イ・チョンシク牧師
・祝福に関する観点—苦難と感謝—— グォンヒョクジュン牧師
- 30 イエス院第四講義プロジェクト ベン・トレイ牧師
・最も古い分裂を癒したものの
- 36 完全な福音 カン・サン牧師
・記憶しておくべき恵み
- 40 希望—愛 パク・ジュオ音楽牧師
・使命を全うすることこそ生きること——
だから今日もこの歩みは止められません
- 46 企画 | 2020 年激浪の朝鮮半島と周辺情勢 オム・ジョンシク理事長
・国と民族のために祈りと知恵を集めるべき時である

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 2020 年 1 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

新年、 父なる神様に 会いましょう



趙 鏞基
ヨイド純福音教会元老牧師

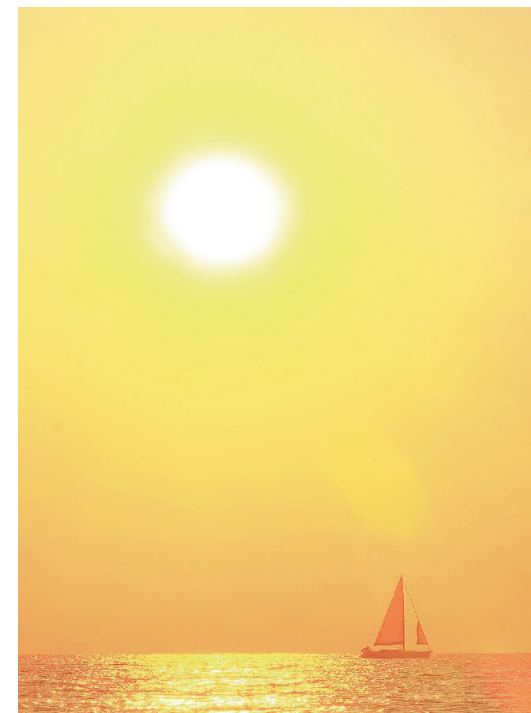
私たちの五感によっては霊である神様を全く知ることができません。しかし、イエスキリストを通して現れる神様の姿は、十分知ることができます。それではイエス・キリストのうちにご自身を現わされた神様はどのようなお方でしょうか。

一番目、神様は私たちのところに直接訪ねてこられ、人生の本質的な問題を解決してくださった方です。世の中のすべての宗教は人間が神を探して行きますが、ただキリスト教は、神様が私たちのところに訪れて来られます。訪れて、霊の救いをくださるだけでなく、魂と肉の問題の鎖からも救ってくださいます。私たちが世の中のものを神としてとらえて、それを追求するとそれによる快楽や満足感は一時的に得られますが、神様が与えてくださる喜びや平安は継続的で永遠です。

二番目、神様は環境と運命を変えられる方です。私はジョージ・ミューラー牧師の経験談を忘れることができません。彼は2千人の孤児の父でした。ある寒い冬の日、急に孤児院の暖房が壊れてしまいました。暖房を完全に直すためには一週間が必要で、その間早速その多くの子供たちは寝るところがなく、困惑してしまいます。そのとき、彼は自分の環境を見ることなく、神様に祈り始めました。

彼の祈りが終わった丁度そのとき、天気が急に暖かくなり始めました。それでも暖房は要らなくなりました。人々は重いコートを脱いで、軽い春着の姿で生活しました。一週間が過ぎて、孤児院の暖房が直って、稼働できるようになりました。すると、その夜から気温が急に下がって、寒い冬の天気に戻りました。環境を変えるジョージ・ミューラー先生の神様は、今日も皆さんの神様、私の神様であります。

三番目、神様は私たちの父となられ、私たちは神様の子供となりました。父なる神様は、すべてにおいて豊かで富んでおられます。子供は当然父が所有しているものに対して相続する権利があります。またすべてに富んでおられる父と一緒にいる人は、どんな艱難や逆境にも決して困惑せず、落胆しません。神様は私たちに豊かなものを与えることを願っておられます。私たちがいつもすこやかで、すべてのことに恵まれることを願っておられる方です。†





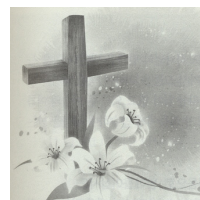
主の御旨がなんであるかを悟りなさい

—— エペソ人への手紙 5 章 15 ～ 17 節 ——

「そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。」

虚しい人生とは、主の御旨が何であるかを悟れずに生涯を終えることです。知恵ある者は、歳月を大切に生きることができます。御旨を知っているからです。暮らしを通して神様に栄光を帰すことが、最上の喜びとなるからです。では、どうすれば神の御旨、御心を知ることができるのでしょうか。

第一に、御言葉を通して知ることができます。聖書は、十戒を始めとして、全人類を対象とした一般的な御旨を記録しています。倫理や道徳的な御旨も含まれますが、最も大切なことは、罪の赦し、病の癒し、呪いからの解放、祝福、永遠なる生命（いのち）、そして聖霊充滿に関する御旨です。いわゆる、五重の福音と三拍子の祝福です。同時に、私たち一人ひとりに対する特別な御旨もあります。それぞれの結婚、家庭、職場、事業、信仰問題に対する答えです。まさしく、レーマであり、私たちの人生を導く神の



神の細い御声を聞き逃してはなりません。時には預言の賜物を持つ者を通して教えてくださり、夢と幻を通して啓示してくださいます。

御言葉です。2 千人の孤児の父として生涯を過ごしたジョージ・ミューラー（19 世紀）は、プロシア（ドイツ）出身のロンドンにおける宣教師でしたが、現地で英語を学んでいる期間中に、多くの孤児が路上で暮らすのを見て心を痛めていました。彼は神様に祈りました。そして、祈りの中で「その聖なるすまいにおられる神はみなしごの父、やもめの保護者である。」（詩篇 68:5）というレーマの御言葉が与えられ、その通りに実践する者となりました。しかし彼は、一度も孤児院運営のための経費を人々に乞うことなく、ただ祈りにより解決し、とうとう 2 千人を養う偉大な人生を送ることができました。御旨のあるところには、神様の助けがあるからです。

第二に、聖霊様の働きを通して知ることができます。まずは、祈りの中で心の願いを湧きあがらせてくださいます。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」（ピリピ 2 : 13）——聖霊様によって得る願いは、食欲ではなく、神の御心だからです。次に、御声によって知らせてくださいます。「地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火

の後に静かな細い声が聞えた。」（Ⅰ列王記 19:12）——神の細い御声を聞き逃してはなりません。時には預言の賜物を持つ者を通して教えてくださり、夢と幻を通して啓示して下さいます。更には、聖霊様による直観を通して示して下さり、心の確信を通して、明確な御旨を教示して下さいます。これら一つひとつを御言葉と照らし合わせ、なおかつ、心の平安があるのであれば、躊躇することなく、大胆に実践しなければなりません。平安こそ、神の御心だからです。

第三に、環境を通して示して下さいます。神様が環境を動かして下さり、ご計画通りに私たちを導いてくださるのです。皆さんが教会に導かれたときのことを思い出して下さい。今思えば、神様の大きい働きにあって、環境が変えられ、導かれたことに気づくはずです。環境の変化の中に主の御旨を見出すことのできる皆さんでありますように——。

第四に、主のしもべたちのカウンセリングを通して知ることができます。この相談は、誰もができるわけではありません。正しい神学を学び、なおかつ牧会の経験を積んだ者でなければならず、祈り中心、礼拝中心、御言葉中心の暮らしをしている者に限られます。聖書を見れば、モーセ、ヨシュア、ギデオン、エリヤ、エリシャ、バプテスマのヨハネ、ペテロ、パウロ等がカウンセラーの役割を担っていたことを知ることができます。御言葉を通して、聖霊様を通して、環境を通して、カウンセリングを通して主の御旨を悟り、実践し、祝福と喜びに満ち溢れる 2020 年になりますよう、主の御名によってお祈りいたします。†

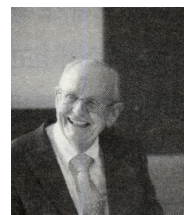
＊ヘンリー・クルーバーの主と共に歩む



主はわたしに言われた。「あの祭壇に上って、わたしに代わって宣言しなさい」——キリストの大使であるわたしは、いつもそのように準備をしてきた。聖書には、わたしたちはキリストの大使であるとはっきり書かれている。

「神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。」（Ⅱコリント 5:20）

ヘンリー・グルーバー（Henry Gruver）牧師



「世を歩くとりなし祈り手」として知られている筆者は、18歳の時からアメリカ・アリゾナ州・フェニックスの犯罪多発地域で主と共に歩き始め、今まで主と共に歩いている。彼は全世界のどこでも彼が出会った人たちのために祈り、福音を伝えている。彼の人生には超自然的な奇跡が多くあるが、もっと重要なことは、彼が神の御言葉に従順して歩きながら祈っているという事実である。

きれいに掘られた非常に大きな穴を歩き回りながら、そこで行われた淫乱で汚れた邪悪な罪の赦しをとりなし祈った。その場所の近くには薪が高く積まれており、いけにえを燃やすための燃料として使われたのであろう。

もし、薪の火が高く燃え上がったとしても、周囲から気づかれることはない。というのも、周辺を取り囲む高く生い茂った森林が、人々の視線を完全に遮断しているからだ。飛行機やヘリコプターに乗ってこの山の上空を飛ぶのでなければ、この火を見つけることはできないであろう。多くの木々が視界を遮る天然の障害物になっているのである。

主はわたしに言われた。「あの祭壇に上って、わたしに代わって宣言しなさい」——キリストの大使であるわたしは、いつもそのように準備をしてきた。聖書には、わたしたちはキリストの大使であるとはっきり書かれている。「神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。」(Ⅱコリント 5:20)

この御言葉の意味は、わたしたちは神の代弁者であるということだ。ゆえに総司令官が命じるままに伝えなければならない。また、わたしたちは神を代弁する者であるため、語るときはその方の権威を持って語るのである。

木々を大きく揺らす風が吹いてきたが、わたしは大きな石の祭壇の上に立ち、叫んだ。まずは北側に顔を向け、そして、南側と東側にも順序よく宣言した。わたしが口を開くと、宣言の言葉が次々と出てきた。

「今から、この世の神々、サタンに対して儀式を行おうとここに入る者は、イエス・キリストが流された血潮と聖霊の力を直面することになる。そういう者は、ひれ伏して邪悪な罪を悔い改め

るか、ここから逃げ去るか、どちらかを選択しなければならない。」

この宣言には力がある。主が仰せられると、奇跡が起こる。何年か後に、宣言の力を確認できる出来事があった。英国南部ウェールズで、ある医者家に泊まった時のことだった。主日の午後、医者はある夫婦に会ってくれないかと言ってきた。しかし、この夫婦は「普通ではない」と警告を加えて、会いたくなければ会わなくてもいいと言ってくれた。彼がその夫婦に、ウェールズを歩きながらとりなしているわたしのことを話したら、是非会いたいと言われたそうだ。

この日、わたしは今まで願っていた『宣言の力』を確認することができた。その夫婦の夫はサタンの祭司で、彼は自信に満ちており、会ったとたん冷たい態度でこう話してきた。

「あなたは都市を歩きながら祈っているそうですね。本当ですか?」「そうです」「大した方ですね」と、彼は嘲笑った。「そのように祈りながら歩き回ったとして、何か変わりますか?」彼は、わたしが彼の正体を見抜いていることを知らなかった。自分がサタンの祭司だとは言わなかったが、わたしはすでにこの国の山々で霊的な戦いをやってきたので、その男性の内にある霊を知っていた。時間を節約するために、すぐに本論に入ったほうが良いと判断し、主が見せてくださったウェールズの高き所について話をした。

わたしは自分の経験をさりげなく語ったが、彼の心には突き刺さったようで、自信に満ちていた彼の表情が少しずつ変わっていった。しかし、引き下がる考えはないようで、高慢な態度で嘲笑った。「あなたがそういう場所に行けるはずがありません。あなたが入って行くのを、彼らが黙って見ているはずはないから——」

「わたしが行けるはずはないと言っているのですね? わたし

は高き所のある場所やその情景を正確に言えます。石に描かれた象徴やその色、祭壇の大きさまでも言えます。今あなたを案内することもできます」

そして、彼に場所や象徴、色について話した。

彼は急に不安な様子になり、わたしの言葉を遮って話し出した。「あの者とはあなただったのか！ あなたは危険な人物だ！」今度はわたしがその人の言葉を遮って話をした。

「いいえ、そのように言わないでください。わたしではありません。恐れるべき方はわたしではありません。ただ、わたしはイエス・キリストの血潮の中にいるだけです。あなたにとって恐ろしくて危険な方はイエス・キリストです。このことは肝に銘じてください。ヘンリー・クルーバーはすでに死にましたので、あなたはヘンリー・クルーバーに何の害も加えることができません。その業をなされた方はイエス様です。ヘンリー・クルーバーではありません」

サタンの勢力を取り扱うときは、この事実を正確に知ることが重要だ。あなたが自分自身を特別だと考えた瞬間、悪の勢力は浮かれたあなたをすぐに攻撃するはずだ。

サタンの祭司は急に語調を変えると、医者に言った。「地形図を持っていますか？ 山や溪谷などの地形の高度が書かれた地図です」「わたしはウェールズ全域を回って手術をしているので、道と地形をよく知らなければなりません。だから、当然そういう地図は持っていますよ。すぐに持ってきますね」

医者は地図を手にとって現われ、サタンの祭司に渡した。彼は地図を広げると、わたしに言った。「あなたが行った山はどこですか？」——彼は心の中で、わたしが彼のことを騙していると思っているようだった。わたしが高き所のある山々を地図

で次々指し示すと、彼は震えはじめた。彼の足の力は抜けて、かろうじて立っている様子であった。「あなたは危険な者だ！」と叫んだ。「わたしは危険な者ではありません」「わかった、わかった」——彼は言った。「あなたは危険な者ではなくても、あなたはわたしたちを苦境に陥らせたのです」「わたしがやったものではありません。イエス様がなされたことです……」

「あなたは自分が何をしたのかかわかっていますか？ わたしたちがこの地域に築いてきた高き所を、あなたは全部台無しにしてしまった。毎年高き所が失われていっていたが、誰がそうしているかわかりませんでした」

数年間、わたしは一人で歩き回らなければならなかった。多くの牧会者や神学者たちが一緒に歩きたいと志願してくるが、いざその日になると誰も現れなかった。しかし、わたし一人で動いていたので、誰の目にもつかずに、そのような場所にそっと潜入できていたのである。

ヨハネによる黙示録3章7節には、主が開かれた門は誰も閉じることができず、主が閉じられた門は人が開けることができないと記されている。わたしは全世界を歩きながらとりなしてきたが、同じようなことはよく起きていたので、いくらでも証することができる。†



安息における7のサイクルは創造と自然、人間生活の周期の根本に刻み込まれているのです。6日間働いて一日休めば、新しい翌週がきます。第一日目は、七日目の次の日です。第八日目は、新しい周期の第一日目です。1は8と同じで、8は新しさを意味します。このパターンは継続して繰り返されます。

最近、私は生まれたばかりの孫の割礼式に喜んで参加しました。聖書は、ユダヤ人の男の子は生れて八日目に割礼を施しなさいと命じています（創世記 17:12、ルカ 2:21）。私は多くの割礼式に参加しましたが、その日に行われるユダヤの儀式により、包皮が切られる痛みのために苦しむ子どもを見たことはありません。

その週に、私は仮庵の祭り——スコット（Sukkot）——を守りました。七日間のスコットが終われば、八日目に開かれる追加的例祭、シェミニ・アツェレットという、特別な安息日の聖会があります（レビ 23:36、民数 29:35、ネヘミヤ 8:18、ヨハネ 7:37）。

この祭りの最終日は、一年の主の例祭の中で最も喜びに満ちた大いなる日のように思われます。

なぜでしょうか？ また、『8』という数字が再び登場する理由は何でしょうか？ 『7』という数学的サイクルにおいて、『8』は新しい周期が始まる『1』と同じです。7 + 1 は 8 なので、8 は 1 と同じようなものです。数字の 8 は新しい始まりを意味します。八日目と一日目は並行されます。

ヘブライ語で『新しい』という意味のハーダーシュは、本来『更新する』という意味です。『月』とも同じ語源の単語です。月は自らが更新するので、毎月は『新しい』の^{げっさく}です。『月朔（月の初め）』に翻訳されるのも同じ単語、ハーダーシュです。

同様に、私たちの力は驚のように新しくなります（詩 103:5）。また、地面も新しくなります（詩 104:30）。そして、私たちの日々も新しくなります（哀歌 5:21）。『新しい』という意味のヘブライ語の単語が、実際に『更新する』意味という事実には、私たちが復活の際に与えられる新しい肉体（ヨハネ 20:20、27；Ⅰコリント 15:35）、新しい契約（エレミヤ 31:31）、新しい天と新しい地における新しい世界（イザヤ 65:17、66:22；Ⅱペテロ 3:7；黙示録 21:1）、そして新しい世界で生まれ変わり、新しい命を得た私たちみな（ヨハネ 3:3；Ⅱコリント 5:17）を理解するのに、幅広い含蓄的意味を持ちます。

新しく更新される

失われた楽園は再び回復されます。すべてのものが『新しく』なって更新されます（黙示録 21:5）。宇宙は七日間にわたり創造されました。より正確に言えば、六日間の創造と七日目に安息がありました（創世記 1～2 章）。安息における7の周期は創造と自然、人間生活の周期の根本に刻み込まれているのです。六日間

働いて一日を休めば、新しい翌週になります。第一日目は、第七日目の翌日になります。第八日目は、新しい周期の第一日目です。1は8と同じで、8は新しさを意味します。このパターンは継続して繰り返されます。

オメル計数は、過越の祭が終わり、安息日後の第一日目から始まります（レビ 23:11,15）。したがってオメル計数の第一日目は、イエシュア復活の日に等価です。オメルは復活であり、それが第八日目、第一日目と同一です。ヘブライ語には日曜日がありません。第一日目と呼びます。第一日目は、安息日後の第一日目です。つまり、第八日目です。

突然、これが聖書的かつヘブル的に論理が理解され、明白になります。メシヤの復活は、過越の祭の安息日後、第一日目でなければなりません。それが第八日目であり、第一日目であるからです。

一週間の第一日目に復活を記念するのは、第七日目の安息日のパターンの拒絶ではなく、7日サイクルの八日目の更新に対する全面的な確証です。七日目に休んで、八日目に新しくなるのです。ユダヤ教の伝統とキリスト教の伝統の間は分離される必要がなかったのです。

同一のパターンは七週の祭、つまり、『シャヴオット』にも適用されます。シャヴオットはその意味自体が平日です（レビ記 23:16）。ヘブライ語でシャヴオットは7×7、すなわち 49 を示します。しかし、ヘブライ語——ラテン語語彙では『ペンテ』コスト（『Pente』-cost 五旬節）、すなわち 50 日目です。7週間後、第一日目である第八日目の更新のパートンが維持されます。この日は、人類に聖霊を授けるのに完璧な条件でありました。

——メシヤの復活：過越の祭の期間中の安息日後、オメルの第一日目

——聖霊降臨：7×7日間にオメルを数えた後、第一日目である七週の祭

なおも仮庵の祭は、幕屋あるいは神殿を奉献した時期に見ていました。第八日目に奉献を終えました。ユダヤ伝統の聖日であるハヌカは、実は神殿奉献が遅れたものです。ハヌカは必要に応じて8日間です。『奉献の祭』と呼びます。だからハヌカは8日間なのです。千年王国の神殿もやはり8日間にわたって奉献されるでしょう（エゼキエル 43:27）。とても驚くことに、ハヌカに8つのろうそくを灯すのは、イエシュアがオルメを数えて第一日目によみがえられたことと、聖霊がシャヴオットに注がれたのと同じ理由です。

7年目ごとのサイクルですが、常に次のサイクルの第一日目である第八日目に更新があります（There is always a seven-year cycle with the time of renewal on the eighth day, the first day of the next cycle）。

——最初に生まれた動物たちは八日目に捧げます（出エジプト 22:30）。

——レビの祭司たちは第八日目に捧げられます（レビ 9:1）。

——らい病の人たちは第八日目に清められます（レビ 14:10）。

——ナジル人が思わず死体に接したときは、八日目に清められます（民 6:10）。

——ノアが活着している間に洪水は起きましたが、彼はアダムから第八代目として、更新をなしたものでした。

安息日は第七日目です。シャヴオットは第七週目です。シェミッター、安息年は第七年目です。『ヨベルの年』は、7×7である49に1を加えた50年目です。7の周期に第八日目の更新

の日を加え、日、週、月、年、更には千年単位へと繰り返されます。

創造の一日、一週の日、例祭の一月は、人類歴史の千年に該当します。人類の今の歴史は6千年間持続されます。イエシュアは第七回目の千年を始めるために再び来られます。第七回目の千年を『千年王国』といいます。メシヤが地上で統治される千年王国です。安息の千年です。主から見れば、一日は千年と同じです(詩 90:4; II ペテロ 3:8)。

メシヤの千年王国が安息の千年であるならば、その次は何でしょうか？ 何かあるのでしょうか？ あります！ それは『大更新』です。永遠の完成、楽園の回復、新しい創造、新しい天と新しい地、新しいエルサレム、究極の喜び、涙と死のない世界……これが聖書の最後の2章、黙示録 21 章と 22 章に出てきます。

それが永遠の安息の初日です。第八日目の千年の初日です。完全な更新の時です。これはスコットの第八日目である最も喜ばしい日、シェミニ・アツェレットに象徴されます。これがすなわち、第八日目の意味であり、新しい創造をいいます。†

アシェル・イントレーター 牧師・リバイブ・イスラエル代表



リバイブ・イスラエル (www.reviveisrael.org) 創業者であり、国際ティクン代表である。ラビ家庭のユダヤ人であり、アメリカのハーバード大学を首席で卒業した後、イエス様に奇跡的に出会った。1991年イスラエルに移住、正統派ラビたちと共に長年の間聖書研究を続けながら教会とイスラエルの関係、ユダヤ人と異邦人の間で和解とイスラエル回復のためのビジョンを持って働いておられる。

写真のある『窓』

キム・ジュソク 牧師 写真作家

神の声は……



神の声は

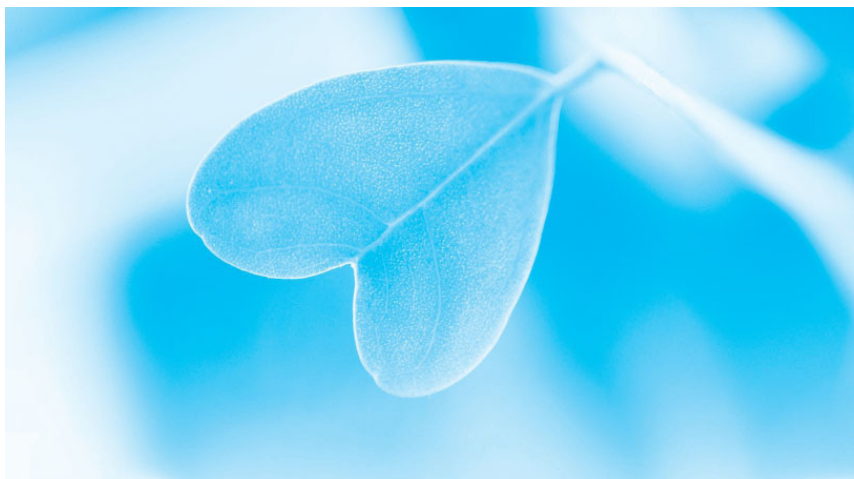
小さくて立ち止まらなければ聞こえません。

小さくても耳から心におりてくれば、
大きな響きとなりひろく広がります。

神の声が

心から手と足に伝わってくれば、
稲妻のようにこの世を目覚めさせます。

八つの祝福： 天国を所有した者の祝福



今回お話しするのは、よく知られている『八つの祝福』（マタイ 5:3～10）と、キリスト者はこの世において『塩と光』にならなければならないということです。これらを正しく理解するためには、まず、『祝福』に対する聖書的概念を正しく理解する必要があります。

祝福と聞くと普通、私たちは、儒教的観念に基づく『富貴栄華』を思い出します。しかし聖書で示す祝福の概念は『イエス・キリストの内にとどまる状態』を言い、世間一般的な祝福の定義とは異なります。

まことの祝福は、お金や権力や名誉や健康などを持っているかどうか、ではありません。神の御前に、イエス・キリストにあっ

本当に祝福された人は、イエス・キリストにあって自身の罪が解決された人です。あわれみ深いイエス・キリストの血潮により、自身の罪を解決した人は、もはや天国を所有しているのです。その人が所有した天国は、あまりにも高価なもので、その人は実に幸いな人です。

て罪の赦しを受け、聖霊様の導きに従い、逆境に遭っても最後まで信仰を持ち続ける人にあるのです。本当の祝福は、上から来るものです。それゆえこれを天に属する『霊的祝福』（エペソ 1:3）と呼びます。祝福とは、物質的な豊かさが、上からこの地の人間に与えられるという意味ではなく、万物を所有した人がその所有を全部差し出しても得られない、神の国の市民権を獲得することを言います。真の至高の祝福は、そのように『高価で尊いもの』であり、ようやく所有できただけでなく、それを値なしに獲得できた、という事実を言うのです。要するに、永生への途上で決定的な障害となる罪の問題が解決された人——罪の赦しを受けた人——が、まことに幸いな人なのです。

ですから、八つの祝福は、地上で受ける物質的な祝福を言うのではなく、むしろ、その人が貧しく抑圧された状態にいたとしても、柔和で清く、平和の実現に力を尽くすことで、自身がキリスト者であると示すことにあるのです。人がそういう状態にいて、そのようなことを追い求めるのは、その人が天国の市民になった幸いな人であることを示しています。

ですから断言しますが、まことに幸いな人は、イエス・キリストにあって自身の罪が解決された人です。あわれみ深いイエス・キリストの血潮によって、自身の罪が解決された人は、もはや天国を所有しているのです。その人の所有した天国は非常に高価な

もので、その人は実に幸いな人です。その人が受けた祝福は、自身の罪が赦されたという事実によって得られたのです。

したがって、その人はもはや、かつての罪人の状態に戻ることはありません。ですから、まことに「悪しき者のはかりごと」に歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う」（詩篇 1:1～2）のです。

八つの祝福は、キリスト者である個々人において、別々に現れる性質のものではありません。程度の差こそあれ、八つの祝福のすべてが、キリスト者である一人の人に集中的に現れなければならないのです。八つの祝福の前提となる、キリスト者の態度と性質について考えてみましょう。

こころの貧しい人たちに

「こころの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」（マタイ 5:3）。キリスト者の性質について、まず考察してみなければならないことは、「こころの貧しい人たちに」に約束された『天国』です。「こころの貧しい人たち」とは『靈的に窮乏を感じる人』を意味します。神の御前で自分自身を徹底的に空にし、自力で罪を克服するには自身が極度に無力であると認める状態を指します。こういう状態にある人だけが、神の統治を受け入れ、全面的に神に従順するようになり、『こころの貧しい人たちは天国を所有するようになる』幸いな人たちなのです。

違う側面から見ると、天国とは、神の統治がその人に現在臨むことを言いますが、同時に、その人が神の国——天国——に入れるようになることを保証します。

「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう」（マタイ 5:4）。キリスト者の性質について第二に考察

してみるべきは、「悲しんでいる人たちに」に約束された『慰め』です。『悲しむ』は、死者に対して哀悼を表したり、他人の不幸や罪に対して悲しむことですが、極度に悲しむ者が幸いであると主は言われます。前述の『心の貧しい』と、ここで言う『悲しむ行為』は、相互に密接な関連性を持っています。ここで言う悲しむことの原因は罪ですが、このように悲しむ行為は、心の貧しい人でなければできないことです。私たちが数え切れない罪を犯したことを、常に悲しむ人だけが真のキリスト者です。

「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう」（マタイ 5:5）。第三に考察してみるべきキリスト者の基本性質は、「柔和な人たちに」に約束された『地を受け継ぐ』祝福です。柔和とは、優しくて柔らかい心を指します（ヤコブ 3:13）。そしてこの柔和は、謙遜な心を内包していて（エペソ 4:2、コロサイ 3:12、マタイ 11:29）、生まれ変わった——新生した——キリスト者に現われるべき基本性質です。イエス様の柔和とモーセの柔和は、『強さの中にある優しさ』でした。

まことの柔和とは正当な義憤を内包します。たとえば、神の真理が偽りなものへと変質されつつあっても放置するのは、柔和でも謙遜でもありません。柔和な人は約束の地、カナンを受け継ぎます。たとえ今は掘っ立て小屋さえ建てる土地がなくても、荒っぽい者たちがすべての土地を持っているとしても、それは少しの間だけです。まことの結果は現在にあるのではなく、明日にあるのです。

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう」（マタイ 5:6）。第四に考察してみるべきキリスト者の基本性質は、「義に飢えかわいている人たちに」に約束された『飽き足りる』です。『飢え渴く』という表現は、人間の本能を強く表す言葉であり、幸いな人は本能的に義を渴望

します。本能的に飢え渴いている人は、幸いな人なのです。他の祝福とは違い、『義』に対しては『飢える』だけでなく『渴く』こともあると表現することで、主は『義』に対する渴きの程度を強調しておられます。義への飢え渴きを満たすために熱く『渴望』する姿勢は、キリスト者なら誰でも保持すべき基本性質です。

「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう」(マタイ 5:7)。第五に考察してみるべきキリスト者の基本性質は、『あわれみ深い人たち』に約束された『あわれみを受けるであろう』です。『あわれみ』とは『慈しみ』ないしは『同情的である』ことを意味します。それゆえあわれみ深い人とは、神が慈しみを施すとお決めになれば最後まで変わらずに慈しみを施されるように、同様の変わらぬ慈しみをもって他人に仕える人を指します。

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう」(マタイ 5:8)。第六に考察してみるべきキリスト者の基本性質は、「心の清い人たち」に約束された『彼らは神を見るであろう』という御言葉に関するものです。ここで「心の清い人」とは、レビ的な儀式的聖潔や単純な道徳的聖潔を指すものではありません。信仰によって心が清くなるのです(使徒 15:9)。心を神に置く人であり、二心を抱かない人です。まことに誠実な人が心の清い人であり、幸いな人です。彼らは『神をみることのできる祝福』を享受し、すでに受け取って楽しんでいるのです。

『聖徒』になったことは大いなる祝福

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」(マタイ 5:9)。第七に考察してみるべきキリスト者の基本性質は「平和をつくり出す人たち」に約束された『神の子と呼ばれるであろう』という御言葉に関するものです。

神は、平和を実現なさる方です。イエス・キリストは、神の平和の実現の働きを最もよく表しました。イエスは、ご自身の血による十字架の犠牲により平和を実現し、私たちが神との和解を楽しめるようにしてくださいました(コロサイ 1:20)。イエスの平和に基づいて、その平和を発展させていく人は幸いな人です。

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」(マタイ 5:10)。第八に考察してみるべきキリスト者の基本的性質は、「義のために迫害されてきた人たち」に約束された『天国は彼らのものである』という御言葉に関するものです。「迫害されてきた人」とは、人々の称賛を受けるために迫害されたふりをする人ではなく、実際に『迫害されてきた人』を指します。このような人は幸いです。主は、天国から始め、天国で終えています。山上の垂訓の全体的主題はすなわち、『天国』に関するものです。

まことのキリスト者は、苦難や迫害に遭うとむしろ喜びます。苦難や迫害の背後に隠された『天国の所有』を見出す人は、キリストの残された苦難を自身の肉体をもって補いながら(コロサイ 1:24)、患難中にも喜ぶのです。大いに喜び楽しむことで、忍耐をもって耐え抜きます(ヘブル 10:32～39)。苦難中に喜べないのは、単にそれが曖昧な苦難だったり、迫害されたふりをするからです。

結論として、アダムによって墮落した人間は、神の恵みでイエス・キリストによって『聖徒』となったということ、これこそが大いなる祝福です。キリスト者たちは、すでに天国を所有している神の子どもであるため、行動ひとつひとつに、神の栄光を現わす者なのです。ハレルヤ！†

祝福に関する観点——苦難と感謝



私たちは普段良い物をもらったり、良い環境が開かれたりしたら「祝福」だと考える。そのような基準で実際、人々は私に向かって「恵まれた人生だ、本当にすごい、うらやましい」などの称賛の声を浴びせる。最近では、2冊目の本が出版され、すでに5月に書いた最初の本は、政府が一年を代表する書籍を選ぶ「世宗（セジョン）図書」に選ばれる栄光を掴んだ。本業の経営が不況の中でも着実に成長し、物質的に不足がなく、同時に大学で教鞭をとる兼任教授の肩書きも持っている。また、経済評論家としてKBS、SBS、CNBC、YTN ラジオ、TBS ラジオ等に出演しているため、顔を知ってくださる方も多くなった。若くして企業の代表、教授、

世の人々がいう、物質と環境に応じて祝福されたか否か判断するよりも、その中で神に出会ったか否かが「祝福」の基準にならなければならない。誰にも苦難は訪れるがその苦難を劇的に変化させる神を目撃するか否かが「祝福」の基準となる。

ベストセラー作家、テレビ出演など、見た目にはドラマの主人公のように暮らしているようで、世間の人からは、うらやましがられることが多い。

苦難は、神が働かれる時間

しかし、「祝福」の定義が上記のとおり、ただ物質的に豊かで良い環境が開かれることを意味するのなら、私の別の話を聞いたら到底恵まれた人生だと言うことはできないだろう。私が軍に入隊してすぐ、父が交通事故で亡くなった。経営していた家具工場は廃業し、その後家族は生活苦に陥った。父を失った心理的な苦痛を癒すためには3泊4日の休暇はあまりにも短かった。家族を気にしながら軍隊での2年2ヶ月の生活をおくった。

除隊後、アルバイトをして生活費を稼いだが全く足りなかったし、常に苦勞している母に申し訳ない気持ちだった。その後、就職し結婚して授かった最初の子は流産した。その心の痛みは想像を超越したものだった。父が亡くなったこととはまた違った苦痛だった。尊い命を再び失ってしまった。再び授かった子は、生後60日頃、腎盂腎炎とそれによる敗血症で生死の境目をさまよった。8歳になった今も、腎臓の経過観察をしている（もちろん今は健康である）。

また、私は2年前に椎間板ヘルニアが原因で右足が麻痺した。MRIの結果では手術をしなければならないといわれた。右足に力が入らない麻痺症状で仕事をするのができなかった。これは即ち経済力の喪失につながり、家族みんなが大きな絶望に陥った。しばらく前には、子供がCT検査で憩室症という診断を受けて抗生剤での治療ができない場合、腸を切らなければならないといわれた。本当に苦痛の中にあった時間は数え切れない。

このように、世間で言う「祝福」の基準で見れば全く恵まれた人生ではない。目に見える派手な姿だけを見て、世間の人は恵まれたと思い込むが、実際このような辛い話をすると「祝福された」と言えない。しかし、それにもかかわらず、私は自ら「私は祝福された人生だ」と言う。しかも大いに祝福されたと思う。それは、その時に神に出会ったからである。

率直にまだ、なぜ父を早く連れていったのか理由はわからない。ただ結論的にみれば、父の死は、母を熱心に祈る忠実なキリストの花嫁にし、私自身も天国で愛する人と再会できるという天国の望みを抱くようになった。また、頼れる人がいないと青年の時から父なる神だけを頼り、何にでも一生懸命になった。今の私を作った原動力である。

妊娠初期の流産を通じて、命の価値は何にも比べることができないということに気づいた。命がどれほど大切なのか、そして大人として守って保護しなければならない命がたくさんいることを悟った。また、子どもが腎盂腎炎と敗血症で苦しんでいる時、主の明確な声を聞いた。私が祈るべき対象が、私の子ではなく、この小児病棟に入院したすべての子供であることを。恥ずかしくも、その後、遅ればせながら寄付を始めた。幸いにも私の子供は祈りの後、奇跡のように回復し、今は元気にしている。

私の椎間板ヘルニアによる右足の麻痺はどうだったか？一ヶ

月間横になって過ごし、絶対肯定、絶対感謝の気持ちで祈り、必ず治るという確信で祈ったとき、主は私の声を聞いてくださった。手術をせずに麻痺が治り、生活への支障もなくなった。そして信仰はますます固くなった。

最近、子供が腹痛のためCTを撮ったところ、憩室症で腸を切除することもありうると言われた。ところが、奇跡のようなことが起きた。金曜日の夜に救急入院して様々な検査のために2日を断食した。日曜日の朝、教会の家族にとりなしの祈りをお願いした直後であった。突然、他の医師が病室に来て言った。

「専門の教授が出勤したので再び診察したところ、憩室症ではなかったです。一般的な腸炎だそうです。救急室の専攻医が判断を誤ったようです。」

大学病院でこのような誤診をするということはとても信じられなかったが、このようなドラマチックな逆転劇が起こる自体、現実味がなかった。これこそ神様が働かれる方法である。

確かに、私が経験した家族の死、病気、貧困、苦痛などは明らかに祝福ではない。主を信じる人も信じていない人も、このようなことを現実には「祝福はない」と一様に言うだろう。つまり、世の人々と私たちクリスチャンが経験することには変わりはないのだ。この世に生きていく限り、神の完璧な創造の秩序の中で、アダムが犯した原罪により、私たちは同じ姿で生きていく。時には怪我をし、時には病気になり死ぬ。しかし、主を信じる私たちと世の人々と異なる点は、そのような苦難を祝福に変えることができるということだ。「祝福」に関する観点自体が違うからだ。苦難を苦難として受けとめず、神が働かれる時間として考えること、自分ではなく主に委ねたとき、主はドラマチックに働かれる。私の人生の中で、既に働かれたようにこれからもうそうだろう。貧しさから豊さに、病気から健康にして下さったように。何よりも

死を恐れずに、天国の望みを以て、天国に行き愛する人々に再び会える信仰を持つようになった。主に従うと、私たちの現実にある暗闇は、夜明けの光をより一層明るくする一つの過程であると認識するようにする。永遠の闇夜ではなく、光のための暗闇になる。結局、私たちは明るく輝く光を迎えるようになる。

このように「祝福」について黙想してみると、結局「祝福」は苦難の定義を変化させる。他の人々に羨まれる上手くいくのも祝福だが、誰も経験したくない苦難の中で主に会おうと、最終的にはそれは「祝福」になる。つまり、物質を多くもらったからでも、良い環境が開かれたからでもなく、主に会えること、それ自体が「祝福」になるというのだ。残念なのは、神を知らない世の人々は、神が成し遂げられる驚くべきことを目撃できず、苦難はただ苦難に終わる。しかし、私たちは違う。むしろその時間に主に会えるから苦難が「祝福」に変化するのを目撃することになる。

私たちの考えを変化させる感謝

ルカ 17 章には、主は重い皮膚病人 10 人を治された。ところが、サマリア人一人だけが大声で神を褒めたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。イエスは、「神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにはいないのか」と言われ、そのサマリア人に癒しを超え、救いまで与えられた。実際、私がイエスは生きておられる神の御子であると世の人に告白する理由、主を堂々と証しすることの理由は、まさに主が私の人生を通し自ら示してくださったからである。先に述べたとおり、私の人生は、到底、神を除いて説明できない。それを自分で知っているので大声で感激しながら主を告白する。そうしなければ、その喜びを抑えことができないからだ。まるでサマリア人が重い皮膚病という苦痛から奇跡のように癒され、その喜びを抑

え切れず大声を出して、神に栄光を帰したように。

残念ながら、私たちは現在、証しがない時代を生きている。主が与えられた「祝福」に対して証しすると、世の人々は懸命に生きて得られた当たり前の対価だと思ったり、まるで、何かの異端に陥ったかのように接したりする。それは違う。苦難の中、神に出会い変化する過程で、私たちは喜びと感謝で証ししなければならない。イエスを知らない人に、堂々とイエスがこのような方であることを言わなければならない。世の中に定義された多くの物質と良い環境が私に与えられたという事柄ではなく、そのように成された神、その神を証ししなければならない。神ご自身が「祝福」であると言わなければならない。しかも小さな声ではなく、サマリア人のように大声で叫びながら、感謝しなければならない。

世の人々が言う物質と環境に応じて、祝福されたか否か判断するよりも、その中で神に出会ったか否かが「祝福」の基準にならなければならない。誰にも苦難は訪れるがその苦難を劇的に変化させる神を目撃するか否かが「祝福」の基準となる。

私たちが祝福の観点を変えようと、苦難はもはや苦難ではなく、神がご臨在する場所が変わっていく。神は愛であるからである。絶対に悪い物を与えないからである。ひとり子の命をさしだしてまで、私たちを愛しておられる方だからである。結局、神に出会う、それ自体が「祝福」である。私たちは、このような「祝福」を味わうとき抑えきれない喜びと感謝を感じるようになる。そして、その感謝は、信じる私たちだけが知るのではなく、神を知らない世の中に出て行って叫ばなければならない。神が祝福の源であるという事実を。それがまさに福音（福音）である。†



最も古い分裂を癒したもの

新しい年の初めに、私がしばしば触れている重要な主題に戻ってみたいと思います。私のコラムを読んで来た方であれば、教会連合のための私の召命をご存知のことでしょう。

「北朝鮮の開放を準備しなさい」との召命を初めて受けたとき、準備において最も重要なことは、イエス・キリストの教会が一つになることであると、主は大変明確に示されました。もし、私たちが一つにならずに、現在の状態で北朝鮮に入ろうとしたら、北朝鮮の人々が意味のある方法でイエス・キリストに出会うことは困難でしょう。私に対する神の御命令は、その働きに必要な財政のために祈ることではなく、韓国教会が連合するように祈ることでした。そして、今まで 17 年間、この主の命令に従順しようと努めてまいりました。

私は、最初に教会内に生じた分裂を癒す運動について、最近知るようになりました。今回は、それと同時に、この主題に対する聖書の教えを分かち合いたいと思います。この運動は、Towards Jerusalem Council II (tjcii.org, 第 2 エルサレム公義会に向けて) です。これは、教会の分裂——ユダヤ教会と異邦教会の分裂を癒そうとする、アメリカやイスラエルのメシアニック・ユダヤ人指導者によって始まりました。

最初のエルサレム公義会は、使徒行伝 15 章に記されています。この公義会の結果は、異邦人クリスチャンが異邦人として生きていくことを許すことでした。彼らはイエス・キリストの弟子になるために、ユダヤ教に改宗する必要はありませんでした。これは重要な決定であり、世界各地で異邦教会の驚くべき拡張の道が開かれたのです。しかし、異邦教会が拡張される間、本来母教会であったイスラエル教会が、成長する異邦教会に押し出され、教会が神の計画の中で、完全にイスラエルの代わりをするようになったと公式に宣言するに至ったのは、大きな悲劇でした。

Towards Jerusalem Council II の目的は、この最初の分裂を癒すために更新されたユダヤ教会、メシアニック信者と連合し、全世界にあるキリストの御体のすべての部分が一つとなることにありました。最近、アジア太平洋地域の 25 カ国のクリスチャンリーダーと TJC II のリーダーが、シンガポールで開かれたカンファレンスに参加し、共に分かち合い、連合のための驚くべき時間を持ちました。この時間を通して、私は多くのことを学びました。

今日、教会の 이슈は、イスラエルとその教会に関連し、神の御旨を理解することにあります。多くの人たちは、マタイによる福音書 8 章 10 ～ 12 節に出てくる異邦人百卒長に語られたイエス様の言葉を、イスラエルが神の国から除外されることを意味している、と思っています。なぜなら、イスラエル人の信仰が異邦人の信仰より小さかったからです。——この部分を詳しく見てみましょう。

「イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、『よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣

き叫んだり、齒がみをしたりするであろう。』(マタイ 8:10～12)

この箇所を正しく理解するためには、新約全体から捉えることが重要です。イエス様は、この異邦人将校の信仰を称賛しつつ、イスラエルこそ神と契約を結んだ相続者であるという事実に基づき、自分たちは神に保証された民族であるとして信仰を持とうとしないユダヤ人指導者と対比しています。神の契約の相続者として、イスラエル人は神の国の子どもでした。しかし、不信仰のゆえに、彼らのために神が準備なさった嗣業を失うこともあるのです。

ですが、私たちは二つの事実を記憶しておく必要があります。第一に、彼らに信仰のないこと(マタイ 23:37、ルカ 13:34)と、数世紀にわたって預言者たちを殺めてきたことをイエス様は嘆いておられるということです。それでも、イエス様はイスラエルとエルサレムを非常に愛しておられます。第二に、異邦人宣教の使徒、パウロの言葉です。彼の手紙の中で、いくつかを見てみましょう。

私が見てみたいと思う初めの聖句は、異邦教会であったエペソ教会に送ったパウロの手紙です。

「だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており、またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった。ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなったのである。キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄した

のである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。」(エペソ 2:11～19)

この箇所の冒頭で、パウロは今、ユダヤ人ではなく、異邦人に宛てた手紙であることを明確にします。ユダヤ人は『割礼』を受けた群れであり、イスラエル人であり、約束の契約に属する人たちでした。彼らは御国の民、神の家族でした。その一方で、異邦人はこれらとは何ら関係のない無縁な者であり、希望のない者たちでした。

しかし、私たちの平和であられるキリストの流された血潮によって、このような異邦人が「近いもの」(エペソ 2:13)になりました。キリストが十字架で死なれたことによって、ユダヤ人と異邦人を一つにされたのです。異邦人はもはや、外国人でも旅人でもありません。彼らは聖徒たちと同じ市民であり、神の聖徒、イスラエルになりました。ユダヤ人と異邦人をキリストにあって区別のない一つの体、一つの新しい存在へと造りかえたのは、神の熱望によるものだったのです。

次回に学ぶことですが、統一とは、他の集団にある過去の遺産を除去することにより、一つが別の一つに吸収されることによって達成されるものではありません。ユダヤ人と異邦人信者が、異なるアイデンティティを持つ神の家族であるということを互い

に認めることで一つになるのです。

選ばれし者

ローマ人への手紙を見てみましょう。10章と11章全部が重要ですが、その中で10章19節から始めてみましょう。

「なお、わたしは言う、イスラエルは知らなかったのであろうか。まずモーセは言っている、『わたしはあなたがたに、国民でない者に対してねたみを起させ、無知な国民に対して、怒りをいだかせるであろう。』イザヤも大胆に言っている、『わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した。』そして、イスラエルについては、『わたしは服従せずに反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた』と言っている。そこで、わたしは問う、『神はその民を捨てたのであろうか。』断じてそうではない。わたしもイスラエル人であり、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の者である。神は、あらかじめ知っておられたその民を、捨てることはされなかった。聖書がエリヤについてなんと言っているか、あなたがたは知らないのか。すなわち、彼はイスラエルを神に訴えてこう言った。『主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこぼち、そして、わたしひとりを取り残されたのに、彼らはわたしのいのちをも求めています。』しかし、彼に対する御告げはなんであったか、『バアルにひざをかがめなかった七千人を、わたしのために残しておいた。』それと同じように、今の時にも、恵みの選びによって残された者がいる。しかし、恵みによるのであれば、もはや行いによるのではない。そうでないと、恵みはもはや恵みでなくなるからである。では、どうなるのか。イスラエルはその追い求めているものを得ないで、ただ選ばれた者が、それを得た。そして、他の者たちはかたくなになった。」(ローマ 10:19～11:7)

この部分は、百卒長を称賛されたイエス様の論調と同じように始まります。イスラエルは不従順で、かたくなになっていました。しかし、イスラエルの外にいる異邦人たちは神に導かれました。使徒パウロは、直ちに、明白なこの問題に対して述べています。イスラエルは罪を犯しました。それゆえ、神によって拒絶され、捨てられるべきでした。

しかし、パウロは非常に明白に、神はその民を拒絶されなかったと述べています。イスラエル、ユダヤ人たちは、そのかたくなさゆえに不従順であっても、依然として神の民です。パウロは、自分の手紙を読む人たちに対し、これらの不従順な人の中にも、エリヤの時代にもそうであったように、真実な人がいたことを思い起こさせています。

そして、神の恵みによって、真実に信仰を守ってきた『残された者』について言及しています。これは、マタイによる福音書 23:27、ルカによる福音書 13:34にあるように、エルサレムに対し嘆くときに語られた御言葉だけでなく、マタイによる福音書 8章に出てくるイエス様の言葉にも当てはまります。神は、何人かの罪のために、すべてのイスラエルを拒絶なさいませんでした。その代わりに、イスラエルが救われるように『残された者』を置いておかれたのです。

私たちがイエス・キリスト教会の連合のために祈るとき、前述の最初の分裂に対する癒しと、それを実現に向けた神の御計画を理解することが重要です。

今回は続けてローマ人への手紙 11章を見ながら、異邦教会とユダヤ教会に対する神の御計画を学びたいと思います。そうすることで、どのように祈るべきか、そして、どのように行動すれば良いかが見えてくるはずです。†

記憶しておくべき恵み



「おっと、これはあまりにも古いですね。もう捨ててください。」

今年も冬の始まりに、ドライクリーニングを終えた私のコートを渡しながら、クリーニング屋のおじさんが投げかけた言葉である。コートの裏地が破れいくつも穴が開いていた。コートを着ようと片腕を入れると、その穴に手が入ってしまう。表地にも多くの染みや色褪せた痕が多くあった。どんなに良い洗剤やクリーニング技術があっても落ちなかったようだ。長い歳月を証明してくれる。

私は10年近く、冬の間ずっとこのコートばかりを着ていた。冬に撮った写真は、いつもこのコートを着て映っているので、子どもたちは「また同じコートだ」と言った。クリーニング屋の社

過去がなくどうやって新しいものがあり得るのか？

出エジプトと荒野がなく、どうやってカナンが有り得るのか？

十字架の暗闇の夜なしに、どうやって復活の朝があり得るのか？

別れる恵みなしに、どうやって出逢う恵みがあり得るのか？

記憶する恵みなしに、どう繰り広げる恵みがあり得るのか？

したがって、新年を迎え、私たちが覚えておくべき恵みを

振り返ってみてほしい。

そして、その恵みを感謝の服として着て欲しい。

その恵みを分かち合いの服として着て欲しい。

その恵みを仕える服として着て欲しい。

それで、その恵みが今年だけではなく、永遠に続くことを願う。

長だけでなく、妻も子供ももうそのコートを捨てて、と言う。私も分かっている。最近のコートに比べれば、本当に重くて暖かくない。しかし、私はこのコートを捨てることができない。記憶しておくべき恵みがあるからだ。

教会を開拓して4年ほど経って本当に苦しかった冬に、私の家庭は再び引越しをしなければならなかった。子供たちを日の当たらない地下室で育つのが嫌だったし、カビや湿気で病気がちな子どもたちを見るのも胸が痛かった。そこで日当たりの良い部屋を探しているうちに、家賃の安い部屋が二つ見つかった。一つは2階であり、もう一つは3階だった。暮らしやすいのは2階であるが、神様は祈るたびに3階に行きなさいと仰せられた。それで私たちは、神様だけを信じて3階に引越すことにした。

ところが、荷物をまとめて引越しをするその日に、私たちは新しい家に着いて驚きました。普通、引越す新しい家には何もないはずだが、ドアを開けてみると、前に住んでいた人の荷物がそのまま置いてあった。もしかしたら私が引越しの日を間違っただ

ろうか？ それとも、何か問題があつて、まだ荷物をまとめて運ぶことができなかつただろうか？ とにかく困った状況になってしまった。私はしばらく待って、大家さんに連絡して話を聞いてみだ。

私たちが入る予定の家には新婚夫婦が住んでいたそう。突然離婚することになり、結婚の痕跡を残したくなかつたからか、すべてそのままにして置いて、二人は数日前に出て行ったきり、連絡も取れない状況だという。

それで、二人が新婚生活のために準備したすべての家具や品々がそのまま残っていたのである。もちろん2階に住んでいる人が夜こっそり来て、高い家電製品とまともな服はすべて持って行ってしまったが、それでもまだタンスやエアコンは残っていた。私たち家庭にはいままでタンス一つなかつたが、驚くべき贈り物が与えられた。しかも、エアコンまでも与えられ、いまだに使っている。何よりその家に住んでいた男性が着ていた服が、タンスの中に何着か残っていた。驚いたのは、顔も見知らぬその男性の洋服のサイズが私とぴったりだった。特に、寒い冬にコートがあればと思っていたが、素敵なコートが入っていたのだ。

おそらく小さいこの服は2階の住人には必要がなかつたようだ。私はその時、直感的に分かつて、口からこの告白が出てきた。「神様が私に贈り物として冬のコートをくださった！」と。私は冬ごとに、そのコートを着て、そのときの引越しのことや神様から与えられた贈り物を思い出す。神様の驚くべきその恵みを忘れることができない。だから、このコートを捨てることができない。

すべてが恵みだ

コートだけだろうか？ 生きてきた中で、神様が与えてくださった恵みは数え切れない。必要を満たしてくださったことも恵

みであるが、別れて失われたことも主の恵みであつた。自分の思い通りになったことだけが主の恵みではなく、むしろ思い通りにならなかつたことが、より大きな主の恵みであつた。ただ、私たちがその恵みを忘れ覚えていないから、不平を言って恨んだりしているのである。いかに高価で良いものを着ていても、常に心は冷たく冷めていくだけだろう。

今日も朝早く教会に来る道に多くの人が見える。急に寒くなってきたので、みな厚手のコートを着ている。ブランドや色、サイズ、品質の違いはあるだろうが、信仰の目で見れば、皆は神様の恵みによって一日をスタートしているのが見える。本当に恵みでないものは何もない。すべてが神の恵みである。きれいなバラの花だけが恵みではなく、バラにある棘も恵みであり、成功だけが神からの恵みではなく、失敗も恵みなのである。健康だけが恵みではなく、病むことも恵みであり、若さだけが恵みではなく、老いることも恵みである。多く持たず、享受できなかったことに不平を言えるが、すべてのもの、それこそが私に最もふさわしいもののなのだ。

新年を迎え、人々は新しいものに集中し新しいものだけを望む。しかし、過去がなくどうやって新しいものがあり得るのか？ 出エジプトと荒野がなく、どうやってカナンがあり得るのか？ 十字架の暗闇の夜なしに、どうやって復活の朝があり得るのか？ 別れる恵みなしに、どうやって出逢う恵みがあり得るのか？ 記憶する恵みなしに、どう繰り広げる恵みがあり得るのか？ したがって、新年を迎え、私たちが覚えておくべき恵みを振り返ってみてほしい。そして、その恵みを感謝の服として着て欲しい。その恵みを分かち合いの服として着て欲しい。その恵みを仕える服として着て欲しい。それで、その恵みが今年だけではなく、永遠に続くことを願う。†

使命を全うすることこそ 生きること——だから今日も、 この歩みは止められません



イタリア・ミラノを代表するスカラ座アカデミーのカルロ・ガイファ声楽コーチは、テノールのパク・ジュオク牧師について、「ベル・カント唱法で人の魂を感動させる声を聴かせることのできる素敵な歌手」と称賛している。パク牧師はスカラ座アカデミーとパルマ国立音楽院、ミラノ市立音楽院を卒業し、有数の国際声楽コンクールで数回入賞して実力を認められた。

米国、ロシア、日本、タイ、シンガポールなどの巡回演奏とウクライナ・シンフォニーオーケストラとの共演、イラクのザイトゥーン部隊慰問公演、国家朝食祈祷会の特別賛美、KBS「ヨルリン音楽会」への出演など、韓国と世界を歩き来しながら、その美声をもって神様に栄光を捧げている。現在、新エデン教会音楽牧師、声楽家、白石芸術大学音楽学部兼任教授、賛意証使役者として活動中であり、

愛唱歌アルバム『懐かしさ』をはじめ、六つの賛美アルバムを発売した。

パク・ジュオク牧師が初めて行く集会では、「お母さんの祈り」という曲を必ず歌う。「息子が生まれ変わったのは、母の祈りです / この息子が生まれ変わったのは、神様の恵みです」——この賛美の歌詞どおり、彼が方向性の見えない青少年時代の生活に終止符を打ったのは、まさに母の祈り、そして主との出会いがきっかけであった。

朴牧師の母は20歳の時に貧乏な家に嫁いだ。仕えるべき人が多く、その上、自分の親の世話も必要だった。父は30歳になる前から腰が曲がる病気で障がい者となり、何もできなかった。苦勞している母の姿を見て、幼い頃から胸を痛めていた。

そうしているうちに、巫女だった叔母が意外なことを言い出した。弟のために祈り、占いしてもらったが何の効果もなかった。ので、「夫と子供を救うために教会へ行け！」と母に命じたのだ。それで母は教会に通い始めた。その時、パク牧師は5~6歳であった。

「母は教会まで2.5km以上の道を、夜明けに、私を肩に背負って通いました。『夫の腰を治してほしい』、『長男が牧師になりますように』と祈りました。私は眠りながら、時々母の涙が私の顔にこぼれ落ちるのを感じました。」

長男の朴牧師は病弱で、小学校3年生まで学校に行った記憶があまりない。しかし、中学校2年生の時に家計の実権を握った祖父は農業で家の財政を賄うことを考え、彼に農業高校に進学するよう勧めた。

「ただでさえ病弱なのに、農業ができるかどうか全く自信がなかったです。そこで母にせがみ、知り合いの家の一部屋を借りて

逃げるように家を出ました。苦勞する母と障害者になった父を思い、最初は立派な人になろうと誓いましたが、長続きしませんでした。学校では真面目でしたが、放課後はいわゆる遊び仲間たちと一緒に酒を飲み、踊りに通いました。それでも、毎週日曜日には教会に欠かさず行っていました。こうして方向性の見えなかった頃は良心の呵責を感じ、『神様、どうか私から離れてください』とさえ祈りました。」

そんな彼のもとに神様が訪ねて来た。高校の卒業式を控えたある日、酒に酔っぱらって記憶がないまま後輩の下宿部屋で目覚めると、もう2日も立っていた。

「窓から差し込む日差しがとても暖かいのに、私はなんだか怖かったです。頭まですっぽり布団を被ったのに、その布団の中にまで日差しが入ってきました。直観的にわかりました。イエス様が来たのです。声が聞こえました。『愛する息子よ、いつまでこんな生き方をするのか。もう戻るべきではないのか？』その温かい声にどんなに泣いたことでしょう。」

その日のうちにすべての友人関係を整理して、神学校に進学することを決心した。これは母親の長い祈りに対する答えでもあった。

音楽の才能は神様から授かった。パク牧師は中3の冬休みに音楽書を何度か読み、楽譜の読み方を覚え、当時一番好きだった賛美歌を鍵盤を手探りしながら練習した。夏休みの間、学校の音楽室で賛美歌を全曲弾き、ピアノを独学した。高2の時には、声楽専攻の先生を通じて初めて声楽を学んだ。コンクールに出て入賞し、おかげで高校2年の時は全額奨学生として学校に通った。

山場を越えるたび、使命を悟らせてくださる

ついに神学校に入学した。祖父は「家出をした奴が狂って神学

校に行った」と言い、すべての財政的支援を断った。母親がやっと学費を捻出してくれて入学したものの、毎日の食事ができないほどだった。早天礼拝の後で友人が食事に出かけると、パク牧師は礼拝室の椅子に横になり、神に文句を言った。

「私のような者が、どうやって主のしもべになるのでしょうか」

空いた教室でピアノの前に座って、主の名を叫びながら徹夜した日々も多かった。その時は気づいていなかったが、その時に、神様を歌うことができる霊的な土台が作られた。神学校に通いながらも音楽の勉強は一日も休んだことがない。開拓教会で副使役者として働く間も、安い給料の中から工面して、月に1~2回は歌のレッスンを受けた。それほどまでに、音楽に対する情熱は格別だった。牧会活動に熱心だった30代半ばには、音楽牧師という特別な希望を抱くようになった。

「お祈りしている中で、『自分がうまくできること、好きなことをしなさい』という答えがありました。神様が留学の扉を開いてくださり、1998年2月、800万ウォンを持って妻と娘と一緒にイタリアに行きました。」

信仰で一步を踏み出したが、危機はすぐに訪れた。お金がなくなり、仕事を探しても見つからなかったのだ。どこにも助けも味方もいない。しかし、その瞬間にも神様は働いていた。6ヵ月勉強した後、ミラノのピアチェンツァという所にある国立音楽院でディプロマ試験に合格し、4年の課程にパスしたのだ。その後、2年課程を履修して、スカラ座アカデミーとパルマ国立音楽院を卒業した。

以来彼は、オペラ歌手および声楽家としての実力と経歴を築いてきた。

「初めの3年間は本当に厳しい時間でした。そうして徐々に言語に慣れ、一所懸命に勉強し、コンサートや小劇場のオペラ舞台

に立ち、少しずつ生活が安定してきました。」

留学してから4年ほど経過した時のことだった。バチカンにあるサンタ・チェチーリア音楽院に16人で構成されたアカペラ合唱団があり、メンバーを募集中だったので、恩師がパク牧師を推薦してくれたのだ。給料の条件が良く、合格さえすれば未来が保証される地位だった。パク牧師はバチカンでオーディションを受け、厳しい審査委員を満足させた。しかし、問題はその後起きた。

「合唱団に就職するためには労働ビザが必要ですが、私がオーディションを受ける1ヶ月前にイタリア労働法が変わったため、労働ビザを受けるのが間に合いませんでした。それで結局、その職をあきらめるしかありませんでした。しかし、その翌春に労働ビザをもらうことができました。『神様、どうせくださるなら間に合うタイミングでくだされば...』と恨みがましい気持ちになりました。しかし後でわかったことですが、その合唱団はローマ教皇がミサを執り行う時や、カトリックの各種行事に参加する時に歌う合唱団だったのです。ですから、もしそこに入れていたとしても、相当悩み、結局は出ることになったでしょう。神様は法律を用いてその道をふさぎ、しかし同時に、私がその合唱団に入れるほどの実力を持っていることを検証してくださったのです。」

留学してから6年近くなり、留学前に神様に約束したお祈りが浮上してきた。つまり、韓国教会に仕え、賛美を通じて世界宣教をするという祈りである。そして彼は、2003年末に帰国した。

神様は、彼の献身と熱情に答えて下さった。新エデン教会が使役地に決まった。またソ・カンソク牧師の使役を助け、国家朝食祈祷会などの大きなイベントにのみならず、地下にある開拓教会に至るまで、大きさに関係なくさまざまなイベントで賛美の働き

に用いられた。パク牧師の言葉によれば、「主のおかげでラッパを吹く人」になったのだ。

2011年になって起きた事件は、神様との関係を新たにし、賛美を歌う使命についても一度考える機会となった。身体に異常が見つかったのだ。

「何日も高熱が続き、何も食べられなかったです。そして、主日が訪れ、夕方の礼拝まで全部終えた後、倒れました。翌日、診断の結果、肝がんの疑いがあるので大病院に行くよう勧められました。その日の夜、死の恐怖の中でどれだけ悔い改めたかわかりません。その時、詩篇18編1節の『彼はこう言った。主、わが力。私は、あなたを慕います。』というみ言葉が与えられました。病室のベッドに横になり、高熱のため氷袋を横に抱え、体の震えが止まらず、奥歯をぎゅっと噛みしめたまま、夜が明けるまで賛美を歌い続けました。」

幸いことに肝膿瘍と判定された。神様が、より一層忠誠をもって仕える機会を与えてくれたのだ。その後、パク牧師の人生は変わった。「魂をもって讃える」と評されるほど、真を尽くした賛美の働きを務めている。

パク牧師は語る。「呼吸を終えるその日まで神様のため賛美したいです。また、自分をロールモデルにしてついてくるという若者たちを見て、改めて重い責任感と使命を感じています。」

「私たち各々に、神様の設計図があります。時間が経てみれば『あ、その時それでこの方にお会いしたんだ』、『あ、それで私をそちらに導いたんだ』ということがわかります。」

「よかったと思ったことが、必ずしもうまくいかず、いつも苦い失敗と涙がありました。しかし、こういった試練があったからこそ成功があり、私も使命者として生きてこれたのです。最後までこの使命の道を歩みます。」 †



2020 年は、同盟と既存多国間の秩序の安定されたフレームから抜け出し、自国の利益のために離合集散し競争する疲れた状況が展開されるであろう。これは、国際状況を非常に誘導的かつ不確実にし、私たちの戦略的知恵がより必要な一年になるであろう。

2019 年は朝鮮半島情勢変化の序曲を演奏した一年で、外交安保、経済など、すべての分野において、やがて押し寄せてくる変化の流れを示してくれた。2020 年はその変化が徐々に具体化され、姿を明確に表す一年になるであろう。「あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのか」(マタイ 16:3) と、主イエスがお叱りになられたように、今やその変化の表面ではなく、その底に流れる大戦略的潮流の流れを読み取らなければならない時であると見なしている。

私たちの霊の目を開け、見えるものの裏側に隠されたものを見

抜くべきであり、耳が開かれ、聞こえない奥の変化の声を聞けるようにならないといけない。それこそが、私たちキリスト者の先見者的、預言者的使命ではないだろうか。またそれは、世界最強大国に囲まれ、内紛に余念のないこの小さな国の生存と復興のためでもある。

美中覇権競走と各自生きる道を図る自国利益主義における私たちの位置と方向

変化の流れは 1945 年前後の体制が崩れ、新しい体制に転換される過程に進入している。21 世紀国際秩序の覇権を掌握するため、既存勢力と新興勢力間の長期的、かつ戦略的対決が繰り返される局面をいう。

数百年間享受してきた英国の主導権が 20 世紀に入り、アメリカが浮上して 1,2 次世界大戦を通して最強国に成長、ソ連との冷戦において勝利して唯一体制を維持してきて、新興勢力中国の浮上という覇権競走の構図へと進入している。過去、アメリカがソ連との冷戦に勝つため、中国という国と戦略的選択・提携により、ソ連を封鎖・包囲してソ連の崩壊をもたらしたように、アメリカはもはやトランプ個人だけでなく与党・野党ともに、中国の脅威は今後アメリカが接すべき最大の国家的脅威であると見なし、総体的に対応している。

中国は国家成立 100 年になる 2049 年まで、アメリカを抜いて世界の覇権国家になることを、いわば「中国ドリーム」に包装し、自分たちの筋肉を周辺国に誇示している。これにアメリカは、終戦の「アジア太平洋戦略」ではなく、「インド太平洋戦略」に路線を変更した。未来の脅威となる中国を制御するためにインドを活用し、アジア国々と連帯し、封鎖政策を推進するという。これによって、アメリカと中国間の全面的競争が始

まっており、2019 年米中間の関税戦争だけでなく、為替・貿易・軍備・教育・文化等において、総体的な対決局面が展開されたのである。

このような米中対決の深化は 2020 年、私たちがどこに位置し、どの方向に行くべきかをしばしば圧迫してくるはずだし、国家的に重大な事案を判断し選択しなければならない状況に追い込むであろう。いわば、新冷戦の形成により、北方三角関係と南方三角関係の対決が再現される可能性が高くなるだろう。最近、ジーソミアを韓日間の単純な情報交換次元のものではなく、韓米日三角協力、アメリカの覇権と対中戦略次元から理解するようになった背景が、まさにそうである。

こういう米中間の覇権競走以外に、また別の変化は 1945 年以後、ブレトン・ウッズ体制、つまり世界的自由貿易主義、アメリカの海上輸送によって保護等国際警察役割、西方世界に対する連帯支援をしてきたアメリカがこういう役割を放棄することで、同盟より自国主義に変わり、国ごとに各自生きる道を見出さなければならない状況になりつつある。アメリカはヨーロッパ、韓国、日本など、アメリカの恩恵を受けていた国々に、より多くの費用を支払うよう要求している。それゆえ 2020 年は、同盟と既存多国間の秩序の安定されたフレームから抜け出し、自国の利益のために離合集散し競争する疲れた状況が展開されるであろう。これは国際状況を非常に誘導的かつ不確実にする、私たちの戦略的知恵がより必要とされる一年になるであろう。

2020 年は不安かつ不確実であり、誘導的国際状況と南北状況に直面

このような二つの国際的流れにおいて、私たちの 2020 年安保状況を展望すると、基本的に韓米同盟を基盤にしている私た

ち安保は、駐韓米軍と相互防衛条約、韓米連語軍連指揮体制の 3 大軸から変化が予想される。

最近、継続論議された駐韓米軍防衛費分担問題は、単なる防衛費分担問題ではなく、駐屯軍指揮協定 (SOFA) を改正すべきであり、なおかつ駐韓米軍の役割をどう規定すべきかにも関連がある。アメリカ内では、駐韓米軍削減を持続的に出ており、国法授權法に従って、場合によっては数千人を減すことも可能になっている。

アメリカは、偵察衛星を通して北朝鮮軍の動きに対し、私たちの目と耳になってくれている。なので、韓米連合訓練と作戦体制の弱体化は私たち安保を阻害する要素になる。ジーソミアを囲んで起きたアメリカの韓国に対する信頼低下は、今後防衛費分担問題をめぐり、より深化される可能性がある。

2019 年、韓国を疑いの目で見つめるようになったアメリカは、2020 年インド太平洋戦略次元において、私たちにどちらに立つのかと、より執拗に要求してくるはずだ。特に、アメリカはトランプ再選という政治行事を前にして、北朝鮮の核問題等に戦略的ではなく、非常に政治的な判断をする可能性が高いと見られる。これによる被害は結局、直接当事者である私たちが経験せざるをえないだろう。

次に、北朝鮮は 2020 年、彼らの方向を予告した状況である。キム・ジョンウンは、アメリカとの核交渉の成立が無理なら、2020 年からは『新しい道』を行くと、すでに天明した事態である。また、北朝鮮は 2019 年 11 月、キム・ケイカン、キム・ヨン Chol、チェ・ソンヒ、イ・テェソン、キム・ミョンギル等のリレー言及を通じて、非核化交渉をしたいなら、アメリカが先に対北朝鮮敵視政策を廃棄せよと、強く要求してきた。

結局、2020 年にも北朝鮮の非核化は、米北間の立場の相違

で接点が見つからないまま、北朝鮮の核能力はさらに増大され、事実上核保有国家として位置づけられることになるであろう。長引いた対北朝鮮制裁も次第に緩み、中国もこれを傍観することで、北朝鮮は国際社会と対韓国政策において、より強硬な立場を堅持するようになるであろう。この状況でトランプ大統領は、大選前は北朝鮮の非核化進展の可能性がないと見なし、自国に直接的脅威となる北朝鮮の核実験——大陸間弾道ミサイル発射中止で満足し、これを国民に自分の治績であると広報・宣伝し、大統領選挙後に本格的な北朝鮮非核化交渉を遅らせることになるであろう。

結局、北朝鮮の非核化の道は遠くなり、南北間の戦略的非対称構図が深化しつつ、安保的脅威が高まる状況が展開されていても、北朝鮮は相当の期間、韓国との関係改善に出る可能性は低い。それゆえ朝鮮半島状況は、平昌（ピョンチャン）オリンピック以前のように、再び不確実かつ不安に展開していくであろう。

このような南北米の政体構造の中で、中国は2019年に建国70周年を迎えたが、最近、最も苦しい状況に陥っている。つまり、共産党独裁の正当性の根拠となる経済成長は停滞しつつある。習近平は登小平の『改革開放と集団指導体制』を捨て、毛沢東式の『共産党一党独裁体制』を構築し、全国民に対するデジタル監視体制を強化する一方、南・東シナ海などで、アジア国家と葛藤し、香港デモ、台湾独立問題等によって、一方主義、強権主義、覇権主義路線を堅持していくだろう。これは韓国のサード問題等をめぐり、明さまに韓国圧迫と経済制限措置を強化していくはずであろう。

その結果、この地域で南方三角と北方三角間で、より深刻な葛藤と対立が起こる可能性もあり得る。日本とは2018年最高裁判所の判決で、私たちが1965年韓日請求権協定を否認する結果を招いたため、私たちは国際社会から条約と国際法を破り、信頼で

きない国に認識され、2020年も韓日間の妥協されない理不尽な争いが展開されるであろう。実利と未来ではなく、名分と過去に捉われるもどかしい状況が持続される可能性が高い。

祈るしかないこの国と教会の現実

このように2020年は、我が国の国際情勢、安保、経済、社会全般にわたり、不安と不確実性に包まれ、どんなときよりも主の知恵を祈り求めなければならない、切実な時期になる。

第一に、国政の責任を持つ指導者たちに知恵と主を恐れる心、波高を乗り越えられる能力、誠実かつ真実な心を持つように祈るべきである。彼らは、国民によって選出され、神の救済史のための道具である。そのために、全社会に影響を及ぼす指導者たちの正確な現実認識と判断、そして国益のみを考える政策決定のためにも祈ろう。政治が混乱で経済が沈滞し、社会に葛藤と対立が激しい状況では、教会が成長し宣教活動が活発に起こらないからだ。

第二に、北朝鮮の民主化と自由のために絶えず祈るべきである。筆者は主日の朝、教会で礼拝を捧げるたびに、この時間あの凍土の北の地にも私たちのように、自由に、平安のうちに思う存分主を賛美し、御言葉が宣言される日がくるよう、切に祈っている。2千5百万の北朝鮮の国民にイエス・キリストを伝え、崩れた教会が再建されるヴィジョンのためにも切に祈ろう。イザヤ書9章2節に「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った」とあるように——。

第三に、教会と社会との関係性に関するものである。教会は島ではない。国家と社会の中に存在しているのである。教会が塩気を失うなら、信じない人たちに後ろ指を差され、宣教の門を閉ざすことになる。光の役割を果たさなければ、人々は教会に来なくなるのである。韓国教会が悔い改め、犠牲の一粒の麦になる努力

によって、この厳しい難局であっても、隣人をあわれみ、赦しと
和解の十字架を負う役割を果たせるよう、切に祈ろう。キリスト・
イエスの御名を貶さず、主が栄光をお受けになるよう、私たちが
より低くなり、主に寄り頼み、仕えるクリスチャンになってほし
い。そうして、小さいけれども完全な塩となって腐敗を防ぎ、味
を出せる皆さんでありますように——。†

発行：純福音東京教会・出版部

【翻 訳】：李カレン 執事、林 俊秀 教育生、李 珍 執事、金原英興 按手執事、朴 宰完 按手執事、
金澤由紀子 勸士

【日本語校正】：篠崎 栄 姉妹、今村和世 執事、松谷恵理 執事、吉田綾子 執事、武石みどり 執事、
向川 誉 執事、澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再 編 集】：金澤由紀子 勸士

あなたの初めは小さくあってもあなたの終りは非常に大きくなるであろう（ヨブ記 8:7）



あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

2
2020

純福音東京教会 文書宣教会

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church